

生産技術の類似性の観点からの検討について

1. 産業分類検討チームにおけるこれまでの検討の概要

(1) 第3回検討チームにおける既存の調査研究の概要の紹介

現行 JSIC においては、製造業の小分類 261 農業用機械製造業（農業用機器を除く）のように、「〇〇用□□業」といった需給が混在した分類項目名の紹介のほか、11 の細分類において原材料投入構造が比較的類似する分類項目があることを紹介した。

(2) 立項や例示の検討の際の考慮

課題を含めて委員の先生方から率直に御意見を伺う場合を除き、事務的には可能な限り考慮して、関係省等と検討した案件を都度検討チームに提案してきた。

2. 前回の検討チームにおける今後の方向性（資料4の抜粋）

今次の改定においては、生産技術の類似性の基準を適用する際の考え方や試行を行い、可能な範囲での検討を進めることとしたい。

具体的な検討事項としては、以下のとおり。

- 具体的な適用の考え方の整理（分野別）
- 実例、試行例
- 今後に向けた課題の整理

また、令和5年度に整備される生産物分類の全体版や生産技術の類似性の適用のあり方を含む諸課題を踏まえて、現行 JSIC の具体的な見直しの方向性等を今次の改定以降も検討していくことは重要と考えており、継続して取り組むこととしたい。

3. 実務上の主な課題

(1) 生産技術の類似性とは具体的に何を指すか。

ISIC では、生産過程が生産技術とともに分類の基準として一つの項目として位置付けられている（生産プロセスと技術）が、供給側の視点としての基準の具体化が必要であると考えられる。

例えば、SUT や IO 関係では業種別（特に財の生産部門）の「投入構造の同等性」が考えられるようだが、それがすべての産業に適用できるか、また、それにより類似性を対外的にどのように説明できるか。具体的に「投入構造」をどのように定義し、計測するか。

(2) 生産技術の類似性をどのように説明できるか。

生産技術の類似性等の検討に当たっては、数量的な比較や検討を行うことが有用であるが、例えば、A分類項目とB分類項目の類似性が数量的に把握できたとしても、それらの数値により類似性をどう評価できるかの課題があると推察される。

他方、実作業面から、数量的な検討のあり方に長時間を要する場合や作業内容が容易ではない場合には、事実上対応することが困難になる。

(3) 各分類対象に相応しい方法

基本的な考え方は各大分類において一定の共通性があるとしても、手法、アプローチの方法は、対象となる大分類によって異なるのではないかと考えられる。その場合に、どのように考え方を整理すべきか。

例えば、製造業では、原材料（生産に投入される財又はサービスの種類）によって分類することが一つの選択肢になり得るが、サービス業に対しては売上原価だけから検討するのではなく、付加価値を構成する各項目等も検討する必要があると推察される。ただし、事業所ベースで把握可能な計数であることが必要である。

(4) 生産技術の類似性による対応のあり方

例えば、A分類項目とB分類項目がある基準により類似性が高いとされた場合、階層構造を含め、それを統合する際の考え方はどうあるべきか。

他方、産業分類のある分類項目を統合し、生産物分類にそれらに対応させる場合、過大な労力と時間を要することなく、継続的に統合前後でも整合的なデータ（事業所数、売上高、従業者数）を把握できるかどうかは課題であると考えられる。なお、経済センサスのデータの再集計等により、それらのデータは入手可能になると想像されるが、特別な集計作業を伴わずにデータを把握できることが担当府省等にとっては重要であると思われる。

4. 検討の方向性

3に示した主な課題に対処するため、令和4年度内に取り組む内容とそれ以降に取り組む内容を整理する。

令和4年度内においては、可能な範囲内でデータによる試行等を行いながら、製造業、商業、サービス業における適用の考え方を検討する。併せて、その検討結果を踏まえつつ、今後の課題も整理する。また、令和5年度以降の検討内容は引き続き整理する。